

季刊

# 連句

第16号

昭和六十二年三月一日発行



季刊連句 第16号 目次

政子石（南柏雑記 14）	1
連句に愛着する	山田 みづえ 2
「市中は」の巻鑑賞（Ⅱ）	東 明 雅 6
歌仙 歳の瀬	草間 時彦 10
捌きの心得	名古 則子 12
暮雨巷のこと	式田 和子 15
校合の限界	杉内 徒司 16
電通会連句部作品	山口 美恵 18
新年	吉田 憲助 初懐紙 秋元 正江
絶頂の城	東 明 雅 20
第20回猫蓑会 二十韻 六卷	22
元日や	市野沢弘子 雪吊 山口みづゑ 大寒や 中島 啓世
初懐紙	秋元 正江 初塚 福井 隆秀 初富士 桜井天留子
七騎の会作品 神田川の巻	大畑 健治 24
（第一次稿・第二次稿・決定稿）	
連句教室 冬ぬくし	東 明 雅 石 露 杉内 徒司 26
一月の床	東 明 雅 初筑波 杉内 徒司 27
二十韻 秋桜・年はじめ	東 明 雅 捌 28

  

新刊紹介	草間時彦著「夜咄」	5	金子恭子著「祭宿」	5
	杉江杉亭著「井の頭集」	17	知足庵一海著「やせ蛙の旅」	17
	自解百句選「山田みづえ集」	3	金子兜太著「皆之」	17

  

雁帛往来・連句会案内	29
------------	----

# 政子石

## 南 柏 雜 記 14

雅

私の師匠根津芦丈翁は、九十歳になつてはじめて雑誌の編輯を習い、連句専門誌「山襖」を創刊、二十四号まで出して昭和四十三年九十五歳で逝去された。その「山襖」第七号に「恋句あれこれ」というエッセイが載っている。原文を左に引用する。

政子の石のぬくき人肌

膝など濡らして給へと稚子を抱き

鶴が岡八幡の境内にあった女陰石である。あまり女陰に似て居る処からか、何処かへ移して今は八幡様の境内にはないとのことだ。

この一連は児を欲しい人と、安産のお礼参りの人などが落ちて、マア佳い赤ちゃんだ、一寸私に抱せてと頼む、その赤ン坊に「オシッコをして膝を濡らして給へ」と呼びかける。其姿に対し赤ン坊の母親は勿論父親も、にこにこし

て見て居るさまである。猶「給へ」の一語でこの両者の人柄も、立派な人々であることが知られる。赤ン坊に尿で濡らされると、子供が出来るとの迷信は今もある。美しい恋句である。

この政子石のことは、この文章を読んだ昭和四十年から、私の頭の隅のどこかにこびりついていた。たまたまこの一月下旬、逗子の本屋良子さんのお宅に招かれ、鶴が岡八幡に大勢の人と寒牡丹を見に行く機会に恵まれた。私は寒牡丹と冬牡丹とは同じものだとばかり思っていたが、親切な園丁さんがその差を実物ではっきり教えて下さったのはありがたかった。簡単に言えば葉が沢山ついて花も多くなっているのが冬牡丹、葉は一枚もなく花も一つがせい一ぱいで咲いているのが寒牡丹で、冬牡丹は沢山あったが、寒牡丹は咲いていたのは十数株にすぎなかった。どちらも風情があるが、寒牡丹は本当にいじらしい気がする。それにくらべると冬牡丹はまだ華やかで色気がある。

ところで、肝腎の政子石であるが、私は偶然それを発見した。まさに芦丈翁の書かれた通りの石だが、鶴が岡八幡宮に今もちゃんと保存されていたのだ。私は二十年ぶりで師匠に巡り合えたかのように懐しかった。本屋邸での私の立句。

政子石陽に艶めきて冬牡丹

明雅

# 連句に愛着する

山田 みづえ

正月前の気分と、ちょうど或るグループで連句を試みる  
ことになっていて、東明雅先生のお電話があった時、威勢  
よくお引受けしてしまったこのテーマ。暮のうちは、付句  
かやり句にしてうまく逃れられそうに思っていたが、どっ  
こい考えてみると、大変な命題だと気付いた。時すでに遅  
し。

俳句雑誌は殆ど交換して読む形でどっさり月末近くに届  
く。すべてに目を通せはしないが、気になるものはどうし  
ても見る。「連句」もその一つ。第一、軽くて読みやすい。  
軽量というのは頁数の話ではない。俳句とはちがう世界を  
見渡せる広い窓なのである。

私にとって俳句は、今のところ、さしあたって退引のひきな  
らぬ月刊誌刊行が控えており、自分の作品とは、静かな格  
闘やぎりぎりの凝視とか、いつも重たい。この重たさは勿  
論、魅力の一面であって、短さ、季語、切字、密度などの  
制約があって快よい緊張をもたらす。が、いつも張ってい  
る弓は切れ易い。時には脱出するというか、身を躲かけたい  
気分もある。炊事や散歩はそういう折のリクレーション  
になるが、俳句以外の書物に親しむことも画を覗いたり、拙  
ない筆をとることも、別な展開と寛ろぎを与えてくれる。

「連句」はその一端にある存在。物珍らしいというより、  
『之元こゝろもと同根に生ず』即ち、俳句と連句は兄弟なのである。  
むしろ連句は兄、俳句は弟、いや叔父と甥という位か。連  
句の人から言えば親元はこちらで、俳句は子孫と言いたい  
かも知れない。連歌から言えばやはり兄弟に見えるかも知  
れない。しかも現在は成長して、俳句は悠々と別天地を築  
き、連句は盛んな時代を経て、一時衰微し、今や心ある人  
々によって復興の歩みを踏み出しているという現状であ  
る。

俳句の仲間、一度はこのことを告げる。「若し、俳句  
を続ける気持があるならば、一度は連句を省みる必要があ  
る」と。すると、必ず歌仙とはそも何者か、実地にやっ  
てみたいという答がかえってくる。それで私は一時、俳句を  
わきにどかして、連句成立の概略と発句と俳句の關係など  
を話して、大体、出勝ちで歌仙を巻いてみることにしてい  
る。即ち俳句講座の中の必須科目の通過科目ということに  
なる。この味を知らないで、俳句々と調子に乗ると上っ  
調子の、現代詩の一行もどきの、人にはわからない文句の  
ようなものでもよくなってしまふ。俳句を本然の俳句たら  
しめる一過程に連句の洗礼が必要だとすら思うのである

が、俳句界ではどう考えるのだろうか。その逆の場合は私はまだ考えていない。こういう連句の勉強仲間の一人の私には「連句」は待たれる存在である。捌き方・味わい方・ルールなどが、草創期の情熱で真面目に論じられる。或は先覚の自伝（牛耳伝は非常に面白かった）など、私は吸収する、つまり戴く一方であるが、編集が少し生真面目すぎると、大体が怠け者だからそう思っているのである。

俳句は句会などを考えると、まさしく座の文芸ではあるが、作るときは独りである。孤独な密室的な作業であり営みである。個の仕事といつていい。連句の方は一座するまでは各人別な道を歩き、そこまでは個かも知れないが、一座すれば衆であり、連座、連帯することになる。俳句は作品として発表すると、作者の思惑と異なる鑑賞がなされて、一句の余情も又どんな風にも波及し考えなされることがあり得るが一応一句独立の歩みをする。連句の方は、捌きの考えて、取捨されてゆくし、前句が出ないと、考えていた句が成立することはまずないし、その場で生れ、そこで連なつて生れる別な世界は、予め考えているものとは違

## 山田みづえ集 自解一〇〇句選

俳誌「木語」主宰山田みづえさんが、昭和三十年から昭和五十六年までの作品百句に、自注自解を加えられたも

うし、つまり予測出来ない未知のものである。個と他数、一句独立と座の創造。現実・架空いづれをうたうにしても俳句は自分のうたであり、作句過程は作者の胸中にある。連句は連衆同志の何が生れてくるかわからぬ期待の中か、独得の言葉による絵巻のような、創造するよろこび、知的遊戯に近い秘かなたのしみがある。相反する性格をもちながら、「句」という形では著しく似ている。そういうことはよくわかつているが、近似ではあるが相似ではない。その上、連句の連衆には、連句復興の情熱があつて、俳句への未練や愛着があるかどうか俳句と連句を共にやっている人がいたにしても、少くとも悩みなどは聞いたことがない。俳句の方には迷いや悩みがいつも伴つて来るのは何故だろうか。本封返りをしてしまつて、俳句があやふやになりはしないか、面白すぎて本業が疎かになりはしないかと思つたりする。大悟徹底して、楽しむ境地になるには、道が遠いように思われる。色気があるからいけないのだとも反省している最中である。

その迷いは、昔、ある正月、えらい人々と一座して半歌

の。作品のおもしろさはもちろん自解の語にも目をひらかれるものがある。昭和六十一年十二月刊。牧羊社・一〇〇円。

仙を巻いたことがあつた時以来のものである。

もう十年も昔になるなつかしいものだ。同席した故池田弥三郎氏が、開口一番「やあ、あなたは東北訛があるねエ、もつとも僕は江戸っ子の訛だけどねエ」これはその通りだからニコニコしていられる。矢つぎ早に「でもねエ、あなたは俳人だからなんだろうけど、俳句になつてしまふねエ、どうしても」と言われる。これは肝に応えた。

捌きの井本農一氏も穏やか乍ら同意見のようであつた。心しているつもりでも、発想はともかく抒情に流れる表現になつてしまふ。かなりの道化者の管の私も、学者の連衆の前に緊張していたのかも知れない。一応の恰好はつけたものの、連句の場合には、余程、心のスイッチの切換を鮮やかにし、融和力というか、素直に開放的になることが要求されると思い知る、よい経験になつた。作家たちが歌仙を巻いた本が割によく出て、それなりに興深く拝見したが、「遊び」と銘打つ通りで、小説家の内蔵する隠し味がちらちら味わる面白さというものである。以て範としていいかどうかは少し問題かも知れない。これも連句ブームの一態であらう。

このあたり、作家の責任ではなくて、連句の骨格というか構成の弱点じゃないだろうかといふ醒めた眼でみてしまふ。「遊び」と「文芸作品」の乖離なのかも知れない。

そんなに冷たいことを言うなら、連句などと無縁になつてしまえばよさそうなもののだが、そう言い切れぬ縁が敵然とある。

今、私共の俳誌「木語」に『連俳好士伝』を連載執筆中の

の浜千代清氏は、連歌に於ける權威だが、私の父の最後の弟子にあたることになる。父は実際に連歌をやる最後（確言する資格は私にはないが）の人らしかった。小学生で「レンガ」などと知っている子は当時いないに相違なく私の眠る部屋の隣の十帖の父の部屋では昭和一けた時代、月に一回連歌が興行されていた。霜焼で痒い手を布団の外へ出してバタバタしたりすると、翌朝父に「昨夜はちと喧さかったぞ」などと言われた。夢うつつの中で「月の座は……」とか「そこにそんなものが出て来てはまこと困る……」とか複数の笑い声と欄間を洩れる灯影と紅茶の香りと匂いた香の名残りの揺曳する気配を「連歌」Ⅱ大人の遊びと承知してゆくような時代があつた。「連歌概説」の中で、凧・梔・倭などの造字をした文化のしたたりを垣間見た驚きも新鮮だった。歌は挨拶として日本人の当然の営みに思っていた少女は、斎藤茂吉や与謝野晶子の姿を父の話の中に折々登場する人と認識しながらも、まさか俳人として一人立ちすることになろうとは思つてもいなかったのである。但し短歌でも俳句でも夏休みのあとなどは、友達の宿題を助けていくらでも代作引受け仕り候だったから、何でもなかったように詩歌は生れてくるものだった。連歌・俳諧の連歌・連句・発句・俳句と来ると、やはり私は連句には愛着があると思わずにはいられない。

俳句は、生来我儘な私に恰好の独りの世界形成に向く形式である。人嫌いだつた私は、今でも相当我慢して俳句雑

誌を刊行している。俳句が好きだからやってゆけるのである。日本人が老齢になり、或いは子育てが終ったりして無我夢中の生活から、ふと自分に返って虚無感に襲われ、何かやりたいと思う。その時に「うたごころ」にそぞろ憑かれて短歌、俳句に入ってくるというのは、何だか泪ぐましいままでに和やかない傾向だと思ふ。こういう人々がいる限り、やはり月刊誌をつづけなければ……と健気に？ 思い決めているので、出来ることなのである。人嫌いで、居眠り名人で情緒不安定の人がよく律気に続けている”というのが専ら友人間の評言である。本人もなるほどと我乍ら素直に頷く。その月刊誌の仕事と自分の俳句作品は心の別なところで生れる。俳句はひとりの心でなければ出来ないのは、分り切ったこと。混同したことがない。

話は元に戻り連句のこと。結論めいて言えば、私にとって連句は昔から恋人で永遠にそうでありたい。愛着があり、ちょっと連衆になって、何食わぬ顔で裏・名残りのあたりで羽搏いてみたい気もするが、シンパでいようとブレーキをかける。しかし、俳句の先輩としては、結社の中でも、集りの上でも、連句を通過儀礼のように一度ならず経験させたいと願っている。人と協調することも学ぶし、面白おかしく遊ぶことに長けた人も出て来るに相違ない。連句好み、俳句向きとはつきり分れてみるのも一つの前進の結果になるに相違ない。それはそれでいいではないか。

大命題にしては拍子抜けの内容で申訳ないが、これで失礼する。「連句」の良き一読者として。

(了)

## 草間時彦著 「夜咄」

俳人協会理事長草間時彦氏が昨年十二月出版された句集。同氏としては「中年」・「淡酒」・「桜山」・「朝粥」に続く、第五番目の句集であり、昭和五十三年春から五十九年春までの作品三一〇句を収めるその軽みの中に滋味のこもった作風が人を魅する。

エリカ咲くひとかたまりの濃むらさき  
鯛の目玉大切に食ひ花便り

(東京美術 定価 二二〇〇円)

三好龍肝 監修

金子恭子 著

## 「祭宿」

著者の金子恭子さんはホトトギス・冬扇・木兎などを経て、今は三好龍肝氏の慈眼舎・また都心連句会・山菜喰舎などに属する現代女流連句人の草分けであり、下町育ちの気つぶのよさ・才気煥発にして美貌という、三拍子そろった人、今度歌仙二十七巻を選び、各巻に寸論を付け、また、他に連句論三編を収録して出版された。都会人らしいセンスに溢れた楽しいこの連句集は、多くの人に愛読されるだろう。三好龍肝氏の寸論も垢抜けがしている。

(緑社社。 定価一八〇〇円)

「市中は」の巻 鑑賞 (II)

東 明 雅

二番草取りも果さず穂に出て

灰うちたゞくうるめ一枚

去 来  
凡 兆

(雑。鯛は雑。うるめ鯛は「をだまき」「通俗志」などでは十月・冬としているが、ここは一枚で乾物となり雑である。人情自)

(現代語訳) 二番草を取りつくさぬうちから穂に出るありさまで、田の草取りに追われ、昼食もそこそこ、うるめ一枚を灰であぶって灰をたたきおとし、飯をかきこむのである。

(付心) 其人の付け。其人の付けは有心の句が多いが、ここは会釈で、四句目ゆえに軽く付けた。

(付味) 「取りも果さず」の気ぜわしい趣と、この句の「灰打たゞく」の忙しい食事の有様が気分的に通う。響の付けである。

(転じ) 打越も付句も庶民の姿であるが、付句にある繁忙の気分、貧しさの気分は打越にはない。それと共に前句の気分とも微妙に変化している。

(補説) 伊賀上野の芭蕉翁記念館蔵の芭蕉真蹟「市中は」の巻には、この句が「破れ摺鉢にむしるとひいを(飛魚)」とある。これが初案で、芭蕉が斧正したのである。初案では貧しさだけで、農家の忙しさが全くあらわれていない。灰は農家の象徴と太田水穂はいうが、その通りで、「うちたゞく」に貧しい中にも忙しい気分があり、また「うるめ一枚」で乾物である点がはつきりした。すばらしい添削である。

灰うちたゞくうるめ一枚  
此筋は銀も見しらず不自由さよ

凡 兆  
芭 蕉

(雑。人情自)



(現代語訳) ここは山国の辺鄙な街道筋で、うるめの干したのを直焼にして食べる有様である。旅人が支払いの銀を出しても、相手はそれを見知らぬというので、不自由なことである。

(付心) うるめの灰をうち叩き食事をする里人と、それに対する旅人の感懐を出した向付。尤も、旅人が「灰をうちたたいてうるめを食う」と見れば、其人の付けであるが、次にまた其人の付けが出るので、これは向付と見た方がよく、また、情景としてもおもしろい。

(付味) 太田水穂は響付というが、響の要素はすくない。また、能勢朝次は「前句の侘びしい余韻を感受したにほひの付けである」というが、これもすこし無理がある。浪本沢一が位の付けとしているのが最も妥当であろう。

(転じ) 前句、打越にあるのは、農村のいそがしく、また貧しい生活である。この付句はそこを旅する人を出したが、その口ぶりから見て都人であり、田舎者に対する優越感が感じられる。そこに大きな変化が見られる。

(補説) そのころ、辺鄙な村里に行くと、金貨や銀貨を見知らぬ人が多く、旅人が困った例は多かったようである。西鶴の「好色五人女・巻三」に京を駈落したおさんと茂右衛門が、丹波越の途中、茶店で休んで立去る時、「此嬉しさに、主の老人に金子一両取らしけるに、猫に傘見せたる如く、厭な顔付して、茶の錢置き給へといふ。さても京より此所十五里はなかりしに、小判見知らぬ里もあるよと、をかしくなりぬ」とある。旅の途中、小買物をする為

には、錢(銅貨)の用意が必要だったことはいうまでもないことで、当時、金貨や銀貨を両替えするには専門の両替屋があり、また両替屋のない宿駅では、旅宿で両替えをした。だから、この付合を、田舎の宿で宿代に銀貨を出した見知らず困ったという解(婆心録など)があるけれども、それは実情にあわぬ解釈と言わねばならぬ。あくまで、道筋の茶店、あるいは民家に泊った場合などを想像すべきであろう。伊藤正雄は、前年に芭蕉が旅行した奥羽地方での体験かと言っているが、それもおもしろい。

此筋は銀も見しらず不自由さよ 芭蕉  
たごとひやうしに長き脇指 去来  
(雑。人情他)

(現代語訳) この街道筋は銀も見知らず不自由なことだと高慢そうにいう男は、とつびょうしもなく、馬鹿長い脇指をさしている。

(付心) 其人の会積あひりの付け。其人の持物を描いた付け。

(付味) 能勢朝次は、前句の自負尊大な趣致から、その余韻で次の句が生まれた「うつり」であると言うが、「うつり」とまではいかずとも、前句・付句の何か非常識なところがかよひ合っている。

(転じ) 打越の「灰うちたゞく……」の貧寒で忙しい農村の気分は一掃されている。

(補説) 江戸時代、武士以外は帯刀を禁じられていたが、農工商の者も旅をする時は、護身用として脇指をもつことが許された。道中指という。脇指は一尺八寸が限度と

されたが、それ以上に長いのを大脇指（または長脇指）と言った。当時の町人は旅をする時は、みな道中指をさし、中でもちよつと派手で伊達な男は長脇指をさしたのである。だから、これを特に博奕うち、あるいは任侠の徒と見る必要はなく、むしろ、その気障な成金趣味を嘲ける意である。

別解として、逆志抄・秘註・幸田露伴・折口信夫・伊藤正雄などの註のように、この脇指を村の百姓がさしているとする説がある。これでは前句と一緒にした場合、その情景が不明瞭であるばかりでなく、打越から三句同じ場が続く可能性が強く、その点からも肯定できない。

婆心録は、伊勢参りの折、奈良で買った錫の銅金をまいた脇指を銀と思いこみ、腰にさして歩くのを見て、旦那寺の和尚が、この筋は銀を見知る者もない物しらぬ所よと歎くさまというが、全く見当違いの説である。

以上で一応表六句を終った。全体の評は最後にまわすことにして、この表六句のみのおもしろさを味わってみるに、表六句は序の段であるから、穏やかにやるのが立前であるが、その穏かさの中にも特色と変化がはつきり出て、読む者を飽かせない。即ち、特色というのは、この序の段に庶民生活のリアルな描写が続ぎ、親しみを持たせているとともに、発句・脇の市中の雑沓と空の月の対比のおもしろさ、第三からは市中から田園に場所をかえ農民の貧しい、しかも豊作を予期した生々とした生活が、これも3と4とで気分が微妙に変化しながら描かれている。ところで

五句目になると、田園から遠い山間僻地の旅行者へと景がうつり、しかも「銀も見知らず」と旅人を通してその地の経済生活が偲ばれるのは、興味深いとともに珍しい。芭蕉の旅行した時の実感が句になったのである。そして6の見馴れぬ物に対する違和感が一種の滑稽感となって、次の句を生み出すのである。

たゞとひやうしに長き脇指

去来

草村に蛙こはがる夕まぐれ

凡兆

（仲春。蛙。人情他）

（現代語訳）馬鹿長い脇指をさしたからいばりの男が、夕まぐれ草むらの蛙をおそれて臆病の本性をあらわした。

（付心）其人の付。また、時分の付。

（付味）能勢朝次の指摘する通り、滑稽・臆病な感じの「うつり」。間のぬけた滑稽さが前句にあるので、それにあわせてユーモラスな俳味がある。

（転じ）打越に自負、尊大の気分があったが、この付句は露伴がいうように、「外敵にして内弱き世のおかしみ」がある。註解は「虚実に扱ひたる付方にて変化の活法なり」と言っている。

（補説）異説として、「蛙こはがる」という言葉の中に田舎人ならぬやさしい婦女子などの気配が感じられる。二句一連を画でも示せば、前句の脇指者は、さしずめ蛙こはがる人の小僕などの姿ともなろうと能勢朝次は言い、幸田露伴・沢本浪一などすべてこの説であるが、それでは前句の味としての滑稽が生きない。また一方、宮本三郎は、打

越から三句同一人とも見られるが、打越は自の句、この付句は他の句で、それぞれ趣向も異なり変化もあるもので、一句を挟んで、その前後に同想・同体の句を付けるを嫌う、いわゆる扉付の難はないと言えよう、と言っている。それにしても、打越・前句・付句がやや気分的に通っている傾向にあるので、打越・前句からは滑稽の情をきっぱり絶ちきって、解釈する必要があらう。

「蛙」はかわず・かえる、両方に読めるが、前者は歌語で古雅、後者は俗語で野趣がある。また蟻（ひきがえる・蝦蟇）は現在では夏の季語であるが、当時は普通の蛙と同様に春（二月）の季語となっている。こは「かえる」と読んで、意味は「ひきがえる」をさしているのである。

「こはがる」は形容詞「こはし」の語幹に接尾語の「が」がついたもので、しきりに恐れる意で、枕草子などにも用いられ、俗語ではない。

ともかく、俳味（滑稽味）のつよい、おもしろい付句である。

草村に蛙こはがる夕まぐれ

凡兆

（初春。露の芽。人情他）

芭蕉

（現代語訳）行燈をもって夕暮時に露の臺を取りに出た女が、草むらの蛙がこわくてたまらず、驚いた拍子に行燈の火をゆりけしてしまった。

（付心）其人の付。人情他の句が三句続いているが、この時代はその点ゆるやかであり、他の会釈とも見られるで

あらう。前句を若い女性と見立替えしたのである。

（付味）許六の「俳諧問答」に、

一「猿みの」下巻俳諧云々

前 草村に蛙こはがる夕まぐれ

露の芽とりに行燈ゆりけす

此句、「ゆり」の字、前にもたれてむつかし、「行燈さげ行」としたし。

とある。これは「こはがる」を「ゆり消す」と受けたところだが、前句にもたれて、「前句の情を引来る」（去来抄・修行）気味がある。それで、「露の芽とりに行燈さげ行く」と直した方が、離れてよいというのである。この許六の非難は尤もであるが、このように直しても、原因（蛙に恐れる）・結果（行燈をさげて行く）という事になりかねず、結局、十分に前句を離れたとは言いがたい。しかも「さげ行く」とした場合は、若い女性の嬌態が全く失われ、詩情が消えてしまう。

（転じ）前句にはべったり付いているが、打越とは全く離れ、転じている。それは前にもものべた通り、「ゆりけす」の一語の力であらう。

（補説）露の芽は、露の臺のことであるが、これは当時の多くの歳時記には初春となっているが、花火草・俳諧初学抄には仲春となっている。芭蕉はこれによったのだらう。

# 歌仙 歳の瀬

草間 時彦 捌

歳の瀬や水の流れと人の身は

明日待たるる葉牡丹の渦

暈替へ青き薫の漂ひて

すぐあけて出すおもたせの菓子

襟立てて楽屋入りする宵の月

秋風の吹く古九谷の壺

蛤となりて雀の泣くならん

厚化粧して黒子隠せず

泥酔の女の腰のふらふらと

まもなく帰る島の住人

飼主を慕ひてはしやぐ犬と猫

螢飛び交ふ月の溝川

誘ひ出て揃ひ浴衣の長短

珈琲の香が鼻をくすぐる

山寺の庫裡にも写真週刊誌

判読つかぬ藩の古文書

見上ぐれば城趾は花の散る気配

鶯笛の遠く聞こゆる

其角

時彦

明雅

徒司

香歩

和夫

雅

夫

雅

夫

同

歩

雅

夫

司

夫

雅

夫

## 深悼・香歩先生

ある会合の帰り、西武新宿線で一緒になった。家がともに驚宮だった。これが香歩さんと知合になった始まりだ。

それから暫くたって、ある会合で一緒になった折、江戸川乱歩に連句作品があると教えられた。わだとしおさんの「杏花村」に関係していた頃なので、それをのせたいと思つて香歩さんの家へ伺った。その乱歩の「衆道歌仙」は同誌の52年8月号に掲載させて頂いた。

「鈴木幸夫」の表札と共に「千代有三」とあるので聞いてみると、「千代有三」の名で推理小説も書いていたとの事で、短篇がのっている「幻影城」も一冊頂戴した。

香歩さんは「鈴の会」を主宰しておられたが、二、三回で満尾しているというので、第八回俳諧時雨忌(55・10・12)におさそいして、連衆にベテラン井手樺晴、田中宏、宮下太郎を配し、固辞する香歩さんに無理強いをして捌い

ナオ

ふる里の母がつくりし土筆和え

財布の中身ほそる月末

打ちもせず買ひもせずして飲みもせず

思ひばかりがつのる朝あけ

吸ひたきは楊貴妃の乳サロメの血

墓の中からニツとドラキユラ

新築の住宅狭く遠くして

赤い富士見え昏い富士見え

柚育ち故に魚の名を知らず

月のちろろに泪ぐむ癖

秋草の一つ一つに立ちどまり

べったら市はいつも賑やか

異国より帰って見れば町変り

丸いポストが消えて四角に

黒棹にふと浮びたる幼な顔

詣でし神は猿田彦なり

小鼓を打って遊べる花夕べ

さしかけられし春雨の傘

昭和六十一年十二月十四日  
於 俳句文学館

夫 司 歩 同 同 同 夫 雅 司 同 同 雅 同 同 歩 司 夫

て貰った。これが香歩さんの首尾初体験であると後日感謝されたのが今思い出される。

その翌月廿七日に興行した第一回「俳諧南北忌」の付廻の宇野信夫氏の立句で始めた歌仙の横溝正史の付句は香歩さんの斡旋によるものだった。

そんなこんなの淡い細い付き合いが続いていたので、香歩さんの早大をやめる時のパーティーにも顔を出したこともある。

その後また車中で会っての立話で、この頃は跡見短大へ行っているとはおっしゃったが、学長になられた事は知らなかった。

その後私は「百合ヶ丘」へ移ったのでおめにかかる機会がなかったが、今度「年の瀬」歌仙で久しぶりに顔を合わせた。

あの夜、大久保の「かちわり亭」で浅酌したが、香歩さんは、これから文楽の方々と会うため国立劇場へゆくのでと先へ帰られた。それから十日後新聞で香歩さんの訃を知った。

(杉内徒司)

## 捌きの心得

名古則子

一月五日、初懐紙百韻の興行があつて、執筆を勤める機会が与えられた。当日は、「正式に準ずる」との事であつたので、いささかの緊張も止むを得なかつたが、何しろ、百韻を時間内に満尾せねばならないという気が先にたつて、時間との戦と相成つた。朝十時十五分から夕刻七時半迄。途中休憩食事等に約一時間があてられたから正味九時間。治定を含めて一句平均五分の計算である。そうした慌しい中で私の経験に過ぎないので、甚だ雑駁な見方であろうが、思いついたことをメモしておくこととした。

捌きは本来、宗匠と執筆の共同作業である。執筆は、式目、作法について、点検をし、宗匠は文学的な評価をする。執筆が担当する式目・作法は、ルールである。多くの付句の中から一句を選び出す予選の条件である。殊に百韻等の長時間に亘る興行の際は、まずこのルールをクリアーしていない句は失格とする。事務的に分別することが出来る簡便且厳正な手段である。

今から三十年も前のことだが、勿論連句を知らなかつた頃、暇をもてあました友人四人で童話をつぎ足して作らうと言うことになった。一人の少女の成長物語である。どうなるかを楽しもうと言う遊びであつた。その際既存の童話の筋立道具立ては使わないと言うのが暗黙裡の協定となつ

た。今にしておもうのだが、人間は遊びをしようとする。必ず禁止の条件を作るものようである。連句の場合、式目は文芸の形式として連歌の踏襲であり、捌くと言う操作に於ては分別の一つの手段である。しかし、作る立場にとつては、ルールがある為に競争心をかきたてられる結果となり、面白味を一味濃くしているように思われる。

ルールがルールとしての機能を發揮する限りでは、なくてはならぬものであろうが、余りに煩瑣となつてくると、連句自体の文芸性をそこねることになる。後に述べる全体の流れの上で、感興をそそぎ、一座を萎縮させることとなろう。執筆は、ルールをよく知っていなければならぬ。しかし、式目の運用方法については、一座をよりスムーズに進める点で、柔軟な態度を持たねばなるまい。

歌仙等の場合は、通常捌き手は、宗匠と執筆の職能を兼行する場合が多いので、ここでは、その意味での「捌き」について考えてみることにする。

前句に対して、数人からの出句があつた場合、連衆各々は、各様の着想で前句の意向をくみとり、それぞれ趣向、意図で付けている筈である。捌き手は、まずそれを正確に受け止めた上で、優劣を定め、一句を選び出さねばならない。当然、そのためには、数句を没にするわけで、捨

てた句の中に実は別の観点からすればもつと面白い展開を  
見せる要素があったのかも知れない。このことは、人生、  
一人の人間が二つの道を同時に歩くことは出来ないと言う  
現実に似て、因縁を感じざるを得ないのだが或一つの句を  
契機として、連衆が相呼応して興に乗ることもあるし、そ  
の句の為に、停滞してしまうことにもなる。捌き手は、  
その分岐点を握っているようなものである。時として、目  
をみはるような、格調高い句、感性あふれる佳句が出され  
ることがあっても、それに惚れ込んだり、のめり込んだり  
することはつしまねばならない。連衆の側からすれば、  
二句の渡りに執心して全体の流れを見失っていることもあ  
る。捌きは、その句の治定が今までの流れにどう働いてい  
るのか、又先々の在り方として、どう動いてゆくかの見通  
しをつけなければならぬ。

間もなく花と言う時に、残忍な句を治定しては花の句が  
出にくくなるだろう。緊迫した状況が続きすぎている時  
は、この辺りで一服しておかないと、次のパフォーマンス  
は生れて来ないだろうと想定してみる。三句先あたりで、  
山場が出来ればよいがと思つていても、その時になつて、  
格調高い句や、とびぎりの美しい自然が出なければ、方針  
は即座に変更せねばならぬだろう。従つて、どんどん切  
替えてゆける柔軟さが必要となる。

捌くと言うことは一つのプロデュースである。或意味で  
は権威である。従つて、連衆から見ても、横柄であつたり抑  
え込むように受取れるようでは、一座の雰囲気は険しいも

のにしてしまう。

捌きと、連衆との間には信頼関係がなければならぬ。  
連衆は、当日の進行を捌きに預けているとは言ふものの、  
無言の内に、自分の句が取上げられない不満を鬱屈させて  
いるかもしれない。それでも、他人の句が明らかに自分の  
句よりもよく、うまく付いていると納得すれば、捌きに対  
する信頼感を持つことも出来よう。適度な競争心を満足さ  
せ、刺激を持たせながら、出来るだけよい句が出るような  
環境作りをせねばなるまい。連衆は捌きが公正な治定をす  
ると言う信頼を持ってこそそのびのびと出句出来るのではな  
かるうか。

信頼感と言えば、こんなこともある。佳句が出揃つて、  
さて何れに治定しようかという時、ふと迷の出ることがあ  
る。こうした迷いに対して、連衆は敏感である。ほんの一  
分か二分が捌きにとつて大そう長時間に感じられるものだ  
が、連衆にとつても同様である。迷つてはならぬと言いき  
かせても、迷が出はじめると焦るばかりである。その間私  
語雑談が聞えるうちはまだしも、ふと音が絶えて、連衆が  
じつとつめよつているように感じられると、一層のプレッ  
シャーとなつて、迷つた揚句にとんでもないものを治定し  
てしまう。

頂きますと言つて、上五を読み上げながら途中絶句、治定  
の撤回を申入れねばならぬ羽目となる。こんなことが度重  
なれば、信頼関係は自ずと薄れ一座の空気は乱れてしまう。  
連句一座は、常に連衆相互の拮抗するエネルギーが行き

亘って、しかも平静でなければならぬ。

よい巻には、一つのまとまりがあるように思われる。それを創出することは、捌きの手腕だと思ふ。連句には筋立がない。従って一句一句は、筋立を表現する為の素材ではない。又、抽象的な一つの美意識を、句によって具象化しようとするものでもない。今日この巻では生の喜びを表現しようとするものと巻きはじめると言うことはないのである。一句は各々独立した世界を持って、或意味ではスナックショットとして完結しているのである。

かりに、不特定多数の作者の長句と短句を数十句集め、誰かが捌きとして、連句の式目、作法に則って、連句の付味を以て三十六句並べるとする。それは、条件を事後的に与えてやるのだからおそらく完璧に近い作品となるだろう。「序・破・急」をつけると言われれば出来ないことではない。しかし、勿論之を連句と呼ぶ人はないだろう。その意味で、連句は付けて行くプロセスに本質があると言へる。前句と付句の間には丁々発止とわたり合った気迫のようなものがある筈である。激しければ激しいなりに、静かな付味はそれなりに。

そう言った一つの緊張感を留めている一巻にすることが

## 武翁賞作品募集

捌きの機能であると言えるのではなからうか。一つのまとまりと言ったが、安定した空間とでも表現しようか。

勿論、安定と言っても、決してすべてが均質であるとか、シンメトリックであるとかスタティックであると言うことではない。或るところは非常に密度の濃いところがあり、強さがあり、大きな断絶ありながら、ダイナミックなバランスを持っていて動くものである。更に言えば、そのようなバランスを得ようとして動いてゆく動きそのものの緩急が一つの美を生み出している状態である。

連句の世界については様々に言われる。しかし根本的に何を表現するのかと言われれば、

「人間と、それを取巻く万象にかぎりない関心を持ち、愛着を持ち、人間が生きていることをいろいろな面から見、表現しようとするもの」

と言いたい。そして、それは一人で想うのではなく、百人百様の見方感じ方を、寄り合い話し合うことである。連句と言う形式が好都合にマッチするのである。

捌きはこの基本的なことを前提として、連衆の句を一巻の中にまとめあげてゆく仕事なのだと言うことを忘れてはならないように思う。

作品は歌仙または二十韻だが、そのやり方は自由、

九月十日(木)までに呈出されたい。

応募作品は「武翁賞応募」と朱書すること。



## 暮雨巷のこと

式田和子

「心ここにあらざれば見れども見えず」  
この諺は至言だと思ふ。

暮雨巷。天明期の俳人、久村晝臺の居処  
木造平家建。主室八帖、次室六帖、玄関六  
帖の三室が晝臺時代からのもの（現在は建  
増して広くなっている）。切妻造、棧瓦葺、  
庇付。

現住所 名古屋市瑞穂区陽明町二丁目四  
番地。

株式会社東海銀行所有。愛知県指定有形  
文化財。

「田辺通り」でバスを降りると見上げる  
ような高い石垣がある。これが暮雨巷の裏  
側で、垣に添ってぐるっと回ると正面入口  
現在玄関になっているのはガラス格子引戸  
で、開けるとずつと通った土間・古い名古  
屋の商家造りで、この土間を中央にして右  
に三部屋。左が晝臺時代の部分に建て増し  
した茶屋等があり、つき当りが台所。

暮雨巷は、もともとは中区大池一丁目、  
いわゆる前津の龍門園という広大な庭園に  
あり、野村氏の別荘であったが、荒廃して

いたのを晝臺が求めて修理を加え住んだも  
ので宝暦年間（西暦一七五〇年代）と思わ  
れる。晝臺遍歴の間は母と妻が住んだとい  
われている。庵号としての暮雨巷は四世迄  
受け継がれているが住いの方は、文化のは  
じめ、水口屋伝兵衛が持つて以来持主は何  
人か変った。大正初年、新道路開通にかか  
る為この建物を中村貴之助氏が現在地に移  
築し、その面影を残しつつ増築されたもの  
が現在の形である。幸に戦災にもあわず約  
二百五十年前の旧態を遺存しているのは喜  
ばしいことといえよう。暮雨巷の名は、こ  
の主座敷を廻る回廊からの景色がまことに  
見事であったが、特に暮雨の景に秀れてい  
たからという。

昭和二十二年、財産税、新田切替え等  
為、暮雨巷は東海銀行の所有となり頭取・  
鈴木亨市がこの家に住まうことになる。室  
内の汚れを修復する程度で二百五十年前の  
形に手を入れることはなかつたので、冬寒、  
夏暑の家であったが、この家をこよなく愛  
し、約十六年をここに過した。

鈴木亨市は私の亡父である。  
まことにうかつな事ながら、長い間、暮雨  
巷は私にとって里帰りする実家そのもので  
しかなかつた。東明雅先生に連句をお習い  
するようになって、連句関係の本も読むよ  
うになり、安東次男の「風狂始末」別冊に、  
「くだって安永・天明のころ俳諧中興の  
機運に際して暮雨巷晝臺がいま一度貞享萬  
風の光を蘇らせようとしたのは、かれが名  
古屋俳人であったから」云々、とあるのに  
びっくり。名古屋の暮雨巷といえはあそこ  
しかないが、もしや、まさかが本物であつ  
た驚きはいうまでもない。心に俳句がなかつ  
た為見えなかつたことを見せてもらった  
因縁は不思議というほかはないが、明雅先  
生に感謝でいっぱいである。

亡父生存中にもつとよく知っていたればよ  
かつたかとも思うが、両親が暮していた頃  
暮雨巷に帰つたときは、めいっばい親にな  
ずんで過したただけの日々を、いささかも悔  
ゆることはない。

参考資料、暮雨巷（東海銀行） 東海の  
俳諧史（さるみの会編） 衛師の華（財界  
名古屋）中興期俳諧の研究（桜楓社） 暮  
雨巷晝臺の門人（愛知学院国語研究会）

# 校合の限界

杉内徒司

1

捌きが満尾した連句を見直す、思い掛けないミスを買っているのに気付いて、加筆、添削をする。この作業、校合は去嫌、文字その他の点検、全体の見直し等、作品の精度を高めるため、どこでも実行されている事である。

作品のよしあしは捌きの責任だから、捌きは気のすむまで、存分に校合すべしというのが通説である。

その通説の根拠は芭蕉がそうしたからだという。その例として、『去来抄』の「先師評」の元禄三年秋、大津膳所の水田正秀亭の俳席の逸話が挙げられる。

その折の芭蕉の立句は残っていないが、正秀の脇句

二つにわれし雲の秋風

につけた去来の第三

竹格子影もまばらに月澄みて

を芭蕉は、「のびやか」で脇句の「はげしさ」に対応していないと断じ、

中連子中きりあくる月影にと直したという。

また「先師評」には

田のへりの豆つたひ行蟹かな

の凡兆の句を芭蕉は

田の畝の豆つたひゆく蟹かな

と直し、作者名を伊勢の万乎として『猿蓑』に入れた話もせている。

これは宗匠は弟子の発句をも自由に直し、作者名を取換へてもよいという例に挙げられている。

2

この正秀亭の一年前、山中温泉滞在中の「燕追行」歌仙興行に芭蕉の指導、添削の跡を北枝が書留めた次の一節に注目したい。

手枕にしとねのほこり打ち払ひ

翁

うつくしかれとのぞく覆面

北枝

つぎ小袖薰売の古風なり

翁

此句に次四五句つきて、しとねに小袖、気味よからずながら、直しがたしとて、其儘におき玉ふ。

「小袖」は「褥」の打越になるからまずいと気がついた

が、もう四、五句進んでいるから、「直しがたし」と云って直さなかった。

これは一座の興を重じたからと思う。

3

近頃は捌ける人がふえてきたので校合の行過ぎという例もでてきている。留字、同字の手直しくらいならよいが、一座した手控の草稿と校合した作品を較べてみると、二、三の句があとかたもなく直されている場合がある。その直

し方がよくなっている場合はよいが、その反対の場合もあって閉口した経験をもたれた方も少くないと思う。  
三百年前の師弟間では普通とされた校合のやり方も、自我意識に目ざめている連衆の集う現代の俳席では一考を要する。問題は一座の興を第一とするか、作品第一主義とするかだが、これは勿論一座の興を第一とする校合を考えるべきではあるまいか。

## 杉江杉亭著 二十韻 井の頭集

杉江杉亭氏はA・C・Cの第二期生の一人で猫藪会の最有力のメンバーの一人である。お酒を好み、お洒落で、ユーモアに溢れた魅力ある人柄と、「脇の杉亭」と異名を持つ達者な力量とは周知のところであるが、その杉亭氏が五十八年六月ごろから、奥様やそのお友達と家庭連句を楽しみ、六十年九月分までの十二巻を纏めたのが、この「井の頭集」である。新しい形式の連句集を先がけて作られたところには、苦心のあとが多く、参考とすべき作品集である。杉亭氏の労を多とし、心から慶賀する次第である。(昭和六十一年十二月二十四日刊)

行。非売品。希望者は三鷹市井の頭二二二六一三〇同氏宅へ)

## 知足庵一海著 やせ蛙の旅

徳島市の郊外羽浦町に住まれる知足庵一山一海宗匠は、明治三十八年の生まれ、先に「喜寿の栞」・「傘寿連句集」を出版されたが、今度は俳句・自伝、歌仙作法、及び実作四十巻を掲載した「やせ蛙の旅」を出版された。一海宗匠は全国の俳諧師と交流があり、私の師匠根津芦丈翁からも教えを受けられたので、いわば私と同門であるが、人格・識見ともにすぐれ、若い時苦勞されただけに世事・人情の隅々まで知悉され、本当に畏敬する兄弟子である。そのこ

とは作品を熟読されれば、自ら理解されるであろう。また、同氏は御結婚以来六十年になられるそうでお二人のお写真が載っているのはほほえましくおめでたい限りである。益々御自愛、御加餐あって、なお末永くお伴せをお祈りする次第である。

## 句集皆之(みなの) 金子兜太

昭和五十六年から六十年までの行住坐臥の日常吟。造語「皆之」は郷里の「皆之町」、現住所の「上之」、夫人の名「皆子」、しかも手拍子も盛んに唄う歌「皆之衆、皆之衆」に通じる。

立風書房 定価二六〇〇円 千三〇〇円

二十韻新年

吉田憲助 捌

謡曲も聞こえ新年句会かな

燈飾る行きつけの店

駈け回る猫のリボンも可愛くて

かりんかりんとかりん糖嚙み

北へ行く汽車待つ人に月明かり

ジンジャの香りベッドに残る

海鳴りや別離の酒を温めぬ

三冠王も売りに出されて

物も買えなきや間接税など無縁

キャベツ畑に虫も住みつく

夏衣四十九日に風邪をひき

団地の窓に干すは手拭

うちの人单身赴任自炊する

北欧女の熱き腰つき

冬枯れてシャトーを照らす月青し

粉雪舞う日岩風呂に入る

「食べたいの」和風定食ささにしき

遠く近くに山鳥の声

花便り旅立つ人に託されて

おたまじゃくしを追ひ掛ける子ら

昭和六十二年一月十六日

於 電通南寮 首尾

連衆 平山昭子 青木秀樹

松本 碧

電通会連句部

「連句のすすめ」

のすすめ方

山口 美 恵

リンクのレの字も知らない人に連句をすすめるにはどうしたら良いか——明雅先生には申し訳ないけれど、私は芭蕉翁も式目も抜きで、まず

「これに付けてみない？」と句を見せる。たとえ

さる処俊二命の女もゐて

俊二

二十韻 初懷紙

秋元正江 捌

隣より謡きこゆる初懷紙

飾納の古りし式台

ファミコンのソフト発売待ちかねて

塀いつばいに漫画描く子等

木下道月の出を待つ人と犬

蟻螂を見てさめてゆく恋

愛憎の糸の絡まるそぞろ寒

お縄頂戴金の延棒

スペインかカナダが終のマイホーム

プールの青に空の蒼溶け

うづぎゐし虫歯不思議に鎮もりて

新人類僧檀家殖やしぬ

許されぬ女が成果の留学生

朝な夕なにくちづけが義務

鴨の夢ゆらゆら揺れて月遠し

根雪となりて地酒温む

半世紀暮し慣れたる街変はり

春の公園草野球終へ

花篝ゆきかふ人を浮きたたせ

きらめく磯ならぶ大皿

昭和六十二年一月十六日

於 電通南寮 首尾 連衆 鈴木 茂 佐古英子

山口美恵

正江 美恵 茂 英子 茂 恵 子 茂 恵 子 同 恵 茂 同 恵 茂 同 恵 子 同 恵 茂 同 恵 子 同 恵

というような恋の句。謹厳実直な俊二氏の風貌と重なって、まず、身を乗り出してくれる。

ファイトのありそうな人には付勝を強調する。

「競合プレゼンと同じなのよ」と。

広告のスポンサーは、どんな広告を出すかを

決める場合、しばしば、広告代理店A、B、

C社：と何社からも企画の提案を求める。各

社が何十案提出しても、決まるのは一社の一

案だけ。この「競合プレゼンテーション」に

よって億単位のビジネスが左右されるから、

広告マンにとって、この言葉の刺激は強い。

そこで「面白そうだな」ということになる。

そして、一辺、句会に出てみると、次は明

雅先生の魅力のとりこになってしまふ、とい

う段取り。

さて、そういうすすめ方に乗ってくれて、

集まった我が電通連句部の面々、広告マンと

しては優秀な人が多い——と思うのだが、連

句の質はどうだろう。

もし、あまり良くない、とすれば仕事熱心

なあまり、句会には休息を求めて弛んだ状態

にあるから……と、これは本音の言訳である。

# 絶頂の城

付勝練習歌仙

東 明 雅

切日 締 20 月 4 日 句 投

ウ8 為すことなくつい鼻毛抜く

叱られて上目づかひに拗ねる犬

十六句目

治定 ボール逃げたる野辺の陽炎

1 蝶とび交ひて風とたはむる

2 団扇作るに忙しき家

3 おしゃべり人形売れるこの頃

4 垣の向ふで誰か呼ぶ声

5 布目瓦の埋まる赤土

6 秒読み開始カメラ点灯

7 学校帰り立読の群

8 栄螺つぎつぎ焼かれ居る店

9 柱時計の遅れぐせつき

10 禅寺いたたく山笑ひ初む

11 玩具の電車砂のトンネル

12 淡雪とけて道のぬかるみ

13 前座が叩く太鼓しまらぬ

14 誰か飛ばせし赤き風船

井田淳子

治子

美幸

東夷

美子

あかり

竹代

正雄

麻子

妙遊

千町

良子

和子

天留子

正雄 孝子

う。しかし次が花の句だとすると、ここであまり力のあ  
る句を出すと、この句に圧倒されぬ花の美を出すことは難  
しいのではなからうか。7は前句にやや付きすぎの感があ  
る。8この句は付味、転じともによく、その点に文句はな  
い。ただ、今までのところ、茶とか、酒とか、ちぎり菟蓐  
とか、割に飲物、食物の句が多かった。ここでまた焼栄螺  
を出すのはその点で遠慮したい。9は打越のダルな気分か  
らやや転じていないようだ。10はおもしろいが、上七に字  
余りがあり、前句との付味にもいささか問題があるろう。11  
この句は付味、転じ、ともによい。一卷の気分も何か童話  
的な明るさの方向に転じられるだろう。12これも花前の句  
としては軽く、明るく、付味、転じともによい。しかし、  
大打越に「凍てる」があるので「雪」はいささか障るので  
はなからうか。13は一句としては抜群におもしろい。前句  
との付味も上々であったので、最初はこれを治定しようか  
と思った。しかし、打越が「為すこともなく」であり、付  
句が「しまらぬ」とともに否定形であるのに気がついた。  
何とか付句の否定形を直しても思ったが、この否定形の  
ところが命の句だけに仕方がなく、残念であった。14も無  
難であるが、「風船を飛ばす」と「叱られて」の間にやや  
根があるようにも思われる。15は釈教の句だし、付味・転  
じ十分であるが、次の花の句が付け難いではなからう  
か。16は9によく似ている。やはり、打越の気分からの転  
じが不十分である。17はこの句一句としては無難である  
が、次が花の句であるからには、芝という植物はなるべく

- 15 店頭に佇つ托鉢の僧  
振り子時計の十三時打ち
- 16 慶子 力
- 17 早も芝草下萌をして  
よしえ
- 18 土間に並びしお遍路の杖  
杉亭
- 19 早列なせる啓蟄の蟻  
みづゑ
- 20 岡持さげて通る自転車  
孝子
- 21 庫裡つやつやと黒光りして  
上月淳子
- 22 緋鯉真鯉が薄氷の底  
哲
- 23 ぶらんこ漕ぐに夢中なる子ら  
美鈴

花前の句は軽い句が欲しい。しかし、それはことさらに華やかなもの、あるいは古典・故事を引用したような句を嫌う意であり、ただ遁句的なものを付ければよいというわけではない。1はその点、打越からは転じ得ているが、次が花の句の場合にはなるべく、風は遠慮した方がよい。それは「花に風」では落花の風情が自ら出るからである。2も春の句、前句にはおもしろく付いているが、打越の無聊さとの忙しさではあまりに対照的でありすぎるのが難である。3は新しい玩具を取りあげた点はよかつたが、このままでは前句から離れすぎではないか。4は前句にはよく付いているが、打越からの転じが足りない。5は釈教を出したところが珍しいが、前句への付味が遠い。6はTVカメラが点灯して撮影を開始しようとする寸前の緊張を読み取っているところ、前句にもよく付き、打越の倦怠感からは転じて、一句としての内容も豊富である。だから、次が花の句でなければこの句は無条件に採用されたことだらゝ、

避けたいし、また下萌をするのは初春だから、季戻りの心配はないにしても、やはりここではせめて仲春か、晩春、三春の句にして欲しかった。18これは付味、転じ上々でしかも釈教の句を出しているところ老巧である。19の啓蟄も初春であり、この句は前句に対する付心が不明である。20は付味・転じともに十分であるが、岡持がやはり飲食食物に関係あるので避けたい。21は釈教の句であり、しかも表現がうまく、付味も悪くない。しかし、転じの点で打越と一続きの場と見られなくもない。そこが難点である。22は犬に對する鯉の向付であろうか。薄氷も初春の季語故、これに花を付けるのは苦勞であろう。23ぶらんこは三春であり、付心・転じともによく、この句で一巻の気分をかえることもできるだろう。その点、治定した句とよく似ている。陽炎は三春で、大打越に月という天象があるが、天象に陽炎のような簞物（そびきもの）は二句去っておれば式目にさわらぬのでスポーツを出した点、付味、転じも十分として治定した。

次は花の定座である。花は絶対にこぼすことはできないから、連句辞典などで、花の句の心得をよく読んで応募して欲しい。前句は春の場（人情なし）、打越は前号にも述べた通り、元々は犬の様子を描いた人情なしの句であるが、叱る人、上目づかひに拗ねられる人の存在も無視できないから、自の句と解してもよい。だから、花の句は場（人情なし）の句をもう一句続けてもよいし、人情他か自他半でもよいことになる。よい花の句を期待している。

第二十回猫蓑会 二十韻 六巻

一月二十一日(水) 参加者 三十七名  
 文京区新江戸川公園松声閣に於て興行

元日や 市野沢弘子 捌 雪 吊 山口みづゑ 捌 大寒や 中島啓世 捌

元日や心身清め客迎ふ 弘子 雪吊りに透きたる松の緑かな みづゑ 大寒や池水の澄み極まりぬ 啓世

マンションの窓白き初富士 明雅 鶴の走る隈笹の蔭 遊 日脚の延びし広き縁先 杉亭

跑踏ます人馬一体快調に 千町 一心にピアノ弾く子の髪ゆれて 麻子 若き等は竹刀の音を響かせて 清子

髪かき上げて呷る珈琲 瑞枝 ボンボン時計の針を合はせる 淑子 新刊本を読みさしのまま 哲

棚渡るる月の光に葡萄濡れ 郁子 早番の夫送り出す月明り 照代 ひた走る夜行列車に月のさし 久美子

秋狂言に更けてゆく村 弥生 狭霧の中にポスト浮出る 一徒 肩よせてくる髪の爽やか よしえ

円高に残業もなしそぞろ寒 雅 初恋の古き思出思草 一徒 老先は異国で暮す同胸も 久

法事終つて伸ばす膝うら 町 催眠術が上手な彼 遊 ジーンズの胸妙法の火と化せば 哲

風花と言ひしが何時か雪しまき 枝 水芸の魔性を秘めし扇にて 恵 大きな鷓鴣が突如べらべら 久

胴着を脱げば緋のこぼれ出す 雅 ネオンギンギラギンの山の湯 司 縄伝ふ流し素麺すすりをり 亭

燃えつくせ添へぬ運命はさだめとし 町 末座まで聞こえぬ法話風荒るる 淑 溶岩の生土神を嘗め尽し 久

エイズものは神戸元町 枝 随筆は月と河豚とのことばかり 司 女のさがは灰になるまで 亭

地下酒場怪しげな者たむろして 生 感度良好耳と襟元 多 形見分け不意に隠し子現はれて 清

薄翅蛭蛸ただよへる月 町 羅馬には青髭男うようよと 多 地酒二級酒知られざる味 久

子の数に合はせ西瓜を切り分けぬ 同 にせものばかりダイヤ・サファイヤ 代 定年の校長は今郷土史家 亭

にこにこ笑ふ恍惚の母 雅 長椅子に素知らぬ振の怠け猫 麻 鮎川信夫の春の詩集買ふ 哲

人の命神様だけが御存知よ 同 絵風字風を揚げる草原 淑 花吹雪ほんぼん時計の午報打ち 清

ローランサンの描く春の夢 町 花びらを舐に分けて漕ぎゆけり 遊 両手に余る紫雲英摘む人 哲

花に舞ふ嬰ハ短調アンダンテ 枝 鳥居をくぐる遠足の列 代 \*光ファイバー等情報機器集中ビル よ

旅の驚庭に来る幸 生 鳥居をくぐる遠足の列 代



初懷紙

秋元正江

捌

初 朶

福井隆秀

捌

初富士

桜井天留子

捌

猫糞もはたちとなりぬ初懷紙

静かにたぎる若水の湯気

窯元を樹立の中に探しあて

シートベルトが肩にくひ込む

月見ても愚痴が先づでる平社員

秋鯖味噌煮彼のお得意

お施餓鬼の小舟にのせて送る恋

覚える間なく消えてゆく唄

ドル安に買った買ったで買ひ支へ

坂のしんどいMOA美術館

煙はく椿の島を背に写し

講釈を聞く旭堂南陵

分別の底が抜けるや家出して

慣れぬ下着の彩にとまどふ

夏の月駄目よいやです困ります

草蜩とぶ故郷の川

母の字の残る琴爪押入れに

漸く癒えし春の風邪っ気

扁壺より丹波秘釀酒花に酌み

小綬鶏啼きてこたまする山

正江

東夷

良子

和子

金子

ふみ

和

夷

良

夷

一

和

夷

み

夷

和

み

一

み

良

さやかに的射技きたり初朶

声高らかに訪へる万歳

山水画軸の風鎮重くして

持ちかへながら梨をむく指

ナイスマディ三人集ひて月を待つ

怨み葛の葉女狐の恋

隠れ棲むひとに貢げるうれしさよ

釈迦の教を悟る阿羅漢

掃き終へて紅の深まる寒椿

越後の酒を熱さちろりに

◎の廃止複雑自民党

エイズ騒ぎでひまな商売

童貞と告げることさへ恥づかしく

教育勅語で鼻すすりゐし

母すこし瘦せて涼しく仰ぐ月

いのちあるごと透ける空蟬

緞帳の銀の縫ひとり水の色

春の袷をいそいそと着て

磐座に祈れば花の散りかから

若鮎擲ふ村の子供ら

隆秀

てるよ

あかり

孝子

彬風

澄子

り

よ

孝

風

秀

孝

り

澄

孝

同

り

風

よ

澄

初富士や連山ほのと従ひつ

朝日を浴びて受くる破魔弓

隣から土産の饅頭届け来て

おしやまなる兄のお行儀のよき

やうやくに湖の面に濡るる月

秋風誘ふ気ままなる旅

接吻は淡きレモンの香りして

ピエロとなりて何時も聞き役

縁日の灯暗く子亀売り

するめつまみにあほる冷や酒

まめ人に諷刺諧謔通じなく

円高とばしてホールインワン

鎌倉の名ある七浜一風ぎに

やつれ鏡の紅少し濃く

寒月に抱きて離れず影法師

漱石忌とや猫と夕飯

描き上げし絵は人生の詩として

白磁に透けて光る白魚

留守番の婆うらうらと花ごもり

窓辺によれば飽かぬ囁

天留子

元子

淳子

貞子

正雄

節子

貞

元

淳

節

貞

雄

同

天

淳

同

貞

雄

元

節

七 騎

二十韻 神田川(B)

二十韻 神田川(A) 大畑健治 捌

神田川北へ渡るや十二月  
色紙を求む冬の暖か

国士

1 神田川北へ渡るや十二月

釣り得たる鮫鯨頒つ誇らかに

明雅

2 小買物する冬の暖か

新車の脇の自転車錆びて

文人

3 誇らしく釣果近所へ配るらん

コーク飲む遁走曲の夏果てて

隆哉

4 忘れしままさびる自転車

施餓鬼の説経小僧尊し

隆哉

5 秋乾き遁走曲をうちならし

遠干潟角無き鹿に月高く

健治

6 施餓鬼の経を読める小坊主

想ひを選び綴る絵葉書

文人

7 遠干潟角なき鹿に月高し

カーテンにパンストを脱ぐ影見えて

隆哉

8 絵葉書選び綴る想ひぞ

セールスマンの不意の再訪

同

9 窓を閉め脱ぎしパンスト

御神火を彼方に町の込み合ひて

明雅

10 セールスマンが不意に

白き波頭を傾ぐ波乗り

隆哉

11 御神火の噴くが遠くにみゆる町

青林檎カンバスに塗る鏡の間

国士

12 波頭も白く波乗りの波

酒にむせびつ我が恋を泣く

文人

13 青林檎鏡の部屋に一つ置き

後朝の月の淡々吸入器

明雅

14 安酒あふりむせる悲しさ

押しくらまんじゅう鎌鼬立つ

明雅

15 後朝の月の淡々吸入器

押しくらまんじゅう鎌鼬立つ

明雅

16 押しくらまんじゅう弾き

菜飯三杯進む食欲

明雅

17 タッチしてゲートボールの

菜飯三杯進む食欲

明雅

18 菜飯三杯進む食欲

蝶の彼方をレールバス行く

健治

19 四阿も囀りに満ち花明かり

蝶の彼方をレールバス行く

健治

20 蝶の彼方をレールバスゆく

二十韻 神田川(C)

国士

昭和61年12月6日(土)18~21時於湯島会館

神田川北へ渡るや十二月  
小買物して冬の暖か

明雅

久々の釣果を頒つ誇らかに

文人

新車の脇に錆びし自転車

隆哉

秋乾き遁走曲をうちならし

隆哉

施餓鬼の説経和尚尊き

健治

遠干潟角無き鹿に月高く

文人

想ひを選び綴る絵葉書

隆哉

カーテンにパンストを脱ぐ影の見え

同

セールスマンが不意にまた来る

同

御神火を彼方に町の込み合ひて

明雅

波頭も白く波乗りの波

隆哉

青林檎鏡の部屋に一つ置き

国士

バーボン呷りむせる悲しさ

同

後朝の月の淡々吸入器

明雅

造成宅地鎌鼬立つ

明雅

タッチしてゲートボールの

明雅

菜飯三杯進む食欲

明雅

四阿も囀りに満ち花明かり

明雅

蝶の彼方をレールバス行く

健治

昭和六十一年十一月八日、七騎の会が発

執筆

足した。これは若手の俳文学者で連句実作

をやるとうとする会である。会場湯島会館で

二十韻一卷(A)を満尾して散会した。その

時の捌き手大畑健治君から校合に関する詳

細な自己批評が送られて来たので、第三回

の昭和六十二年一月十七日の会では、もっ

ばらこの校合(B)をもとにして議論百出、ついに最終案(C)になった。この過程の一部は大畑さんの文章にあるが、その説が必ずしも受け入れられず、元の姿に戻ったり、さらに直されて、別の形に変えられたものもある。これで万全ではなく、さらに欠点もあるだろうが、とにかく、校合をこのように懇切にやることは、連句上達の第一歩と思うので、思い切って掲出した。直

## 捌き手の感想

大畑 健治

- 2 発句に合わせて具体性を上七に加えた。「求む」は他の語にしたいところであるが、発句「渡る」、第三「配る」、折端「さびる」とあり、これら動詞の終止形・連体形「る」は活用形や語を換えた。
- 3 第三としては、もう少し動きが欲しい。「配る」「頒(わか)つ」は同義語であるが、強さと働きが微妙に違う。「誇らしい」気持ちが強める為に、「誇らかに」とし、小山体に仕立て、初五「釣り得たる」と呼応させた。「鮫鱈」で具体性を持たせた。
- 4 原句は四句目ぶりであるが、表にしているはややマイナー。この句を戴いたのは、

裏に移るパネとして、「さびる」が欲しかったからである。心理的な動揺をはのめかしておけば、木に竹を接いだような不自然な裏移りの構成は避けられる。冬の中に春はあるという『徒然草』の自然観である。前三句を「新軍」で受け、「錆び」で裏に続けた。「一脇に―錆び」としなかったが「に」が気に懸かる。「錆び」は動詞のつもりであるが、「一脇の」では名詞になってしまふ。送り仮名の「び」は強引に動詞にしようとした未練の名残りである。

- 5 打越「干瀉」と「乾く」。二十韻で音・声が続くのも如何。勿論この句が先に出口されていたのであるが、脇句の気候が近いので、この句を一直した。
- 8 原句は散文的。語句を入れ替えた。
- 9 「閉め」「脱ぎ」「のぼす」で、一句の焦点が定まらず。焦点を一つに絞った。
- 11 打越に窓際があり、苦肉の策。
- 12 「傾ぐ」により、主観を添えた。
- 13 句がおとなし過ぎる。隆哉氏の「パンスト」も部屋の中に恋句であったが、ここでは恋の印象を薄めて、このように改案させて戴いた。「白」と「青」は支考

の論書にいう色立てである。これは単なる貞門・談林の語呂合わせとして理解してはいけないであらう。言語に付随する印象作用があるからである。一句の意味を研究者に詮索すると、鏡の間で絵を描く者などなく、観念的な句である。ここは空擲的な印象の飛躍を以て改案させて頂いた。

- 14 文人氏の原句の意味はよく分かる。前句が確かな恋句ならば、その思いは余情として溢れる付味となるからであらう。前句は原案・改案とも恋の味が極めて薄い。あるといえはあ、といった程の句である。そこで明確な恋句の意味を盛り込んだ。付所の問題であらう。
- 16 原句でも問題はない。しかし、前句と付句とを見ると、もう少しアクの強い方が面白そうである。下七を「鎌馳立つ」にすると、前句からの移りがよくなり、「弾き出さる」と「タッチして」のもたつきがなくなる。また、「チャンピオン」に匹敵する語句としても「鎌馳立つ」でなければ、句の位が応じないであらう。以上、妄言多謝。

連句教室

61・12・7

関口芭蕉庵

冬ぬくし

明雅捌

冬ぬくし庵で拾ふ鳩の羽

正江

山茶花の垣声をかけられ

耕子

凍豆腐藁で結ばれつるされて

明雅

ワープロ習ふ手引きよみよみ

麻子

物置けば影の生まれて望の月

清子

さらさらと鳴るさいかちの茨

蓼子

角袖のべつたら市をひとめぐり

あかり

盲導犬の役をする我

江

俺お前つなげるヒモのようなもの

江

秘仏開帳掌を重ねつつ

江

まぼろしの真白き富士よ裾野まで

麻

中国孤児は飛行機でとぶ

清

水馬と共に首ふる童たち

り

聖杯映す月の涼しき

耕

なつかしき「イヴの絵」のバクスター

清

鉢巻赤く春闘の列

同

紙屑が風に転がる花の宴

り

柳ゆらゆら知らぬ顔して

麻

雛流しさんだらぼつちなられ添へ

江

わさびをおろしもてなしの膳

耕

父母が夢に舞ふなり能舞台

艸

ひげなめあひし捨猫のゐて

耕

深吉野の鮎雑炊に恋の味

艸

こいさんとうさんきあんちゃんたち  
姥さかりうす紫のガウソ着て  
胸突坂に義歯落しぬ

歌かるた好きな絵札のきまりある  
杉戸襖の鶴翔てる月  
九月蚊帳峽の板屋に友と来て

秋の時雨の礎歩みつつ  
苦しみも悲しみもみななひませに  
曆売ある橋の灯

百合鷗大利根川の入り切り  
春の炬燵をたたむころあひ  
新しき菜たづねん花の奥

上簇すみてひそかなる里  
石 落

すこやかに石路の一茎芭蕉庵  
鯉は眠りて短か日の池  
月の宴若き基敵待ちかねて

ピアノ絶ゆれば虫の声満つ  
芸術祭受賞の父の笑み栄へ  
古き書物に埃うつつら

貼りついて昼も灯点す峽の宿  
文殻燃せばいのちあるごと  
紅型の帯を几帳に投げ掛けて

手枕まききうねる黒髪  
風薫り葵祭も近づきぬ

江 麻 清 耕 艸 麻 江 清 耕 艸 麻 江 清 耕 艸 麻 江 清 耕 艸

四条堀川築地片蔭  
玻璃簾「水」分ければ淡き月  
違法駐車はひとの迷惑

貧乏釣り大名釣りの目白押し  
木彫り狸の下げし徳利  
ファックスでカトマンズから花便り

春光あびてパンナムの窓  
歌詠まん人磨小町式部の忌  
唐草模様褪せし風呂敷

約束の果たされぬまま月変はる  
ひっかき傷に滲む血の痕  
純粹といふ名の若さ恋のエゴ

西の市告ぐボスターの町  
御神火の島に主待つ犬と猫  
議論尽くせどつかぬ決断

徒にビールグラス重ねつつ  
世が世なればと何時しかに老ゆ  
望下り山家の矮鶏の関つくり

かりんの香り闇にただよひ  
詰将棋ついに詰まらぬ夜長なり  
入れ歯壊しの手焼き煎餅

路地裏に端唄の師匠孫と住む  
輪中の邑を夢に描かん  
レガッタの曳きゆく水脈に花吹雪

土手の並木にもゆる陽炎

江 麻 清 耕 艸 麻 江 清 耕 艸 麻 江 清 耕 艸 麻 江 清 耕 艸

晴 町 風 晴 光 哲 風 晴 町 哲 町 晴 光 哲 風 晴 町 哲 町 晴 光 哲 風

一月の床 明 雅 捌

恋女房に刺青の痕

雌鼠毛づくろひして鼠鳴き

雪しんしんと降りしきる井戸

神怒る三原の山の火を眺め

売上税に立たぬ対策

月瘦せて鴉の早贄そのままに

ホップ刈りたる結の挨拶

いちど限りか臂のほくろよ

目覚めては昨夜の吐息耳朶に湧き

ごみの車のバックオーライ

天守閣聳えて市は花日和

春の蜜柑をふかふかとむく

初筑波 徒 司 捌

お妃様の靴に頬づり

人魚姫泡と融けたる物語

竹の足場でビルが建ちゆく

円高に西瓜ガブリとやけくそに

老人ばかりふえる世の中

幻の月かかりたり銀沙灘

霧に濡れつつ切符買ひたり

秋の蟬小さく鳴きて旅終る

雀近づき餌を啄む

かじかみしキーパンチャアの息白く

招待券をかくす引出し

花曇雲の絶間に飛行船

修学旅行めぐる神々

五歳を姪らぬ妻いたはりて

香水並ぶ白き鏡台

不可解と人生断ちし月の流

叱声うけし僧房の庭

般若湯いづくからか手に入れし

唐草文の風呂敷の嵩

花あかり母と別るる日の近く

病をおしてメーデーの列

女生徒の息はづませて春祭

亭主を探すおつむ目当てに

時代屋で買ひし時計のねじを巻き

またもテレビで映す「哀愁」

ラブレター猫の首輪で往き来して

柄

司

柄

柄

柄

柄

柄

柄

柄

柄

柄

柄

柄

柄

柄

柄

柄

柄

柄

柄

柄

柄

柄

柄

柄

柄

子

哲

人

江

正

文

千

竹

明

雅

人

町

江

哲

江

代

同

同

同

同

同

同

同

同

同

五月を姪らぬ妻いたはりて

香水並ぶ白き鏡台

不可解と人生断ちし月の流

叱声うけし僧房の庭

般若湯いづくからか手に入れし

唐草文の風呂敷の嵩

花あかり母と別るる日の近く

病をおしてメーデーの列

女生徒の息はづませて春祭

亭主を探すおつむ目当てに

時代屋で買ひし時計のねじを巻き

またもテレビで映す「哀愁」

ラブレター猫の首輪で往き来して

お妃様の靴に頬づり

人魚姫泡と融けたる物語

竹の足場でビルが建ちゆく

円高に西瓜ガブリとやけくそに

老人ばかりふえる世の中

幻の月かかりたり銀沙灘

霧に濡れつつ切符買ひたり

秋の蟬小さく鳴きて旅終る

雀近づき餌を啄む

かじかみしキーパンチャアの息白く

招待券をかくす引出し

花曇雲の絶間に飛行船

修学旅行めぐる神々

柄

柄

柄

柄

柄

柄

柄

柄

柄

柄

柄

柄

柄

柄

柄

柄

柄

柄

柄

柄

柄

柄

柄

柄

柄

柄



## 連句会案内

## 雁帛往来

。連句教室

日時 第一日曜日 午後一時—五時

会場 関口芭蕉庵

文京区関口二ノ一ノ三

(電) 九四一—二一四五

。柏連句会

日時 第三日曜日 午後一時—五時

会場 光ヶ丘近隣センター

(南柏駅よりバス 光ヶ丘団地マ  
ーケット下車)

。A・C・C連句・理論と実作

日時 第二・四水曜

午後一時—三時

会場 新宿住友ビル四十八階

朝日カルチャーセンター

(電) 三四四—一九四一 (代表)

。猫養会 (会員制) 年四回

(一月・四月・七月・十月 第三水曜日)

会場 松声閣

文京区新江戸川公園内

(電) 九四一—九六四九

▼A・C・C九期生で猫養会々員でもあつた秋山清子(采女)さんが元日、持病のため急逝された。深甚の悼意を表し、御冥福を祈る。

▽「国文学解釈と鑑賞」は五月号に「連句(俳諧)への招待」—伝統と革新—の特集号を出すので、私は一月十六日、座談会「連句の楽しさ・面白さ」に出席した。メンバ―は暉峻康隆博士、草間時彦氏、宇咲冬男氏である。四月十日発売の予定。

▽同誌において私は「近・現代の連句界と連句誌」の項目を担当、執筆した。

▼柏連句会の実況が下鉢清子さんの紹介で朝日新聞(二月五日夕刊)に大きく取り上げられた。これは連句普及に貢献するところが大きいだろう。

▼名古屋の俳誌「耕」の主宰加藤耕子さんは毎月関口芭蕉庵の連句教室に出席。由緒ある名古屋俳諧の復活を企画しておられる。

▼名古屋といえは猫養会幹事和田和子さんの名古屋の旧居が天明朝の有名な俳人久村

暁台の暮雨巷であったことが分かり、本人

も驚いておられるが、私も驚いた。本文(一五頁参照)。

▽私は「連句辞典」の編纂に助力された若手俳文学者に実作を教える「七騎の会」をつくり、毎月一回出席。この会は作品を丹念に分析・校合するところに特色がある。

▽A・C・Cは従来、「連句実作入門」(午前)と「連句・理論と鑑賞」(午後)の二回に分けて講義していたが、四月からは午後一回(一時より三時まで)、連句(理論と実作)の一本にすることになった。新しい人も交え、月二回の楽しい会にしたいと思っている。

季刊「連句」第十六号

定価 五百円

発行 誌代 年二千円(送共)

発行 昭和六十二年三月一日

編集人 杉内 徒司

発行人 東 明 雅

季刊「連句」発行所

〒277 柏市つくしが丘二ノ二ノ二二

電話 ○四七(七五)一一九二

振替口座 東京七—五二—一三三

印刷所 神谷印刷株式会社

東京都豊島区高田一ノ六ノ二四

電話 ○三(九八)一七二—一五

# 連句辞典

東明雅・杉内徒司・大畑健治編

B 6判

三五二頁  
三五〇〇円

連句の実作・鑑賞・研究に  
必須の知識をすべて網羅！  
初心者から研究者まで使え  
る本邦初の連句辞典

本書は、用語篇、人名篇から成る。用語篇は、現在使われている用語を中心に三二四語を選び、意味・用法の解説をし、「参考」欄の引用文は中・近世の諸資料から、用語がどのように記されているかを抄録。人名篇は、近代以降に活用した連句人、俳人五十数人を選び、項目末尾に代表的な連句作品を収録した。また、連句入門の手引き、連句概説、連句略史を付した。近代連句の状況を知る上で貴重なものである。

## 収録項目例

〈用語篇〉 挙句 会釈 一座一句 有心 打越  
思いなし 表八句 懐紙 歌仙 軽み 切字  
景気 五句目 差合 去 式目 四春八木

〈人名篇〉 天野雨山 伊藤松宇 上田聴秋  
鶴沢四丁 小林見外 下平可都三 関為山  
高橋玄一郎 高浜虚子 中村俊定 野村牛耳

水原秋桜子編 二三〇〇円

## 俳句鑑賞辞典

貞徳・宗因から現在活躍中の俳人  
まで二七〇人の古典的かつ伝統的  
な名句一〇〇〇を収め、豊かな実  
作の経験を生かし句作にも役立つ

水原秋桜子編 二八〇〇円

## 現代俳句鑑賞辞典

結社や傾向にとられず現代の代  
表的な俳人五〇五人の代表作一四  
六八句を収め、公平に客観的に鑑  
賞した。俳句鑑賞辞典の重複なし

大後美保編 二八〇〇円

## 季語辞典

日本の季節にまつわる言葉がスモ  
ッグ・不快指数などまで収録し、  
春夏秋冬の四季に分類した。気象  
学者の立場から厳密に季節を分類

中村俊定監修 四五〇〇円

## 難解季語辞典

古典俳句に使われる季語は今日で  
は意味や表記が難解で正しい解釈  
や鑑賞ができない。本書はそれら  
の季語二千語を収め、解説を施す

国語学大辞典 B 5 一九〇〇円

国語慣用句大辞典 A 5 六八〇円

国語慣用句辞典 A 5 六八〇円

国語史辞典 B 6 三三〇円

日本語語源辞典 B 6 一八〇〇円

京都語辞典 B 6 一八〇〇円

擬音語擬態語辞典 B 6 三三〇円

近世上方語辞典 A 5 一五〇〇円

花柳風俗語辞典 B 6 三三〇円

新語俗語辞典 B 6 三三〇円

難訓辞典 B 6 三三〇円

名乗辞典 B 6 二八〇〇円

名数数詞辞典 B 6 四三〇〇円

あいさつ語辞典 B 6 二八〇〇円

新版 こぼ遊び辞典 B 6 五八〇〇円

類語辞典 B 6 二八〇〇円

類義語辞典 B 6 二二〇〇円

表現類語辞典 B 6 四一〇〇円

新版 文章表現辞典 B 6 二九〇〇円

神島・村松編

東京堂出版

101東京都千代田区神田錦町3-7

電話03-233-3741-2